

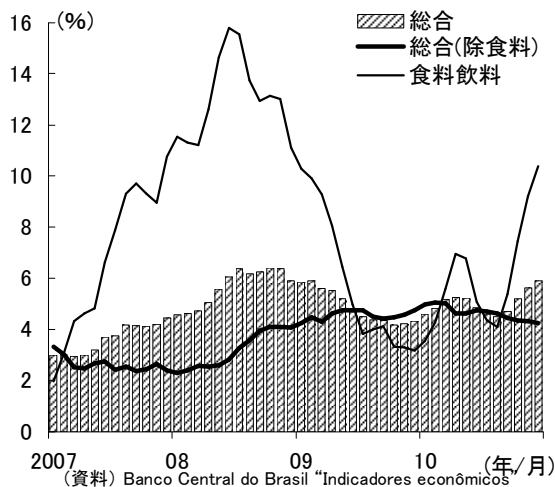


成長加速するブラジル経済

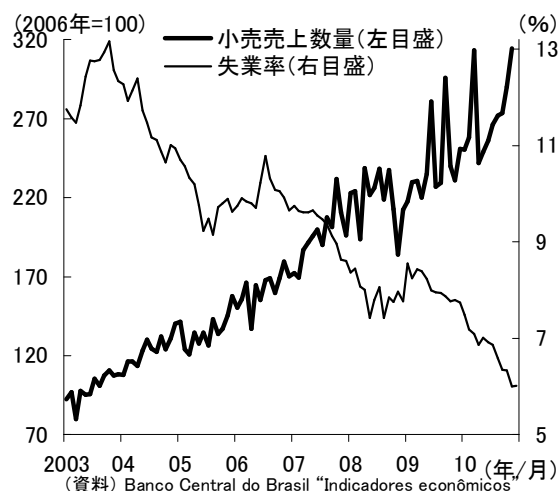
～ コアインフレ沈静化のもと、内需が一段と盛り上がり ～

- (1) ブラジルについてもこのところインフレ加速と金融引締めを懸念する見方が台頭。しかし、多くの新興国と同様、物価上昇は食料品分野に限定（図表1）。2010年12月の消費者物価は前年比5.9%と6%台乗せが目前。一方、食料品を除く総合でみると、10年3月の5.0%をピークに月を追って上昇ペースが鈍化。12月には4.2%へ。
- (2) 中央銀行は09年半ば以降、累次の利上げを実施。基本金利は8.75%から本年1月11.25%へ。もともと、内需を原動力とした力強い経済成長が継続。まず個人消費は所得雇用環境の改善を映じて一段の盛り上がり（図表2）。前ルーラ政権当初13%に達した失業率は昨年末6%へ半減。代表的耐久消費財の乗用車販売台数は昨年末年率400万台へ。
- (3) 一方、企業セクターも活況。消費関連をはじめとしたサービス分野にとどまらず、リアル高に直撃されている製造業分野も好調。衣類など新興国や途上国からの輸入が増加している軽工業分野では一部で軟調な動きもみられるものの、同国が強みとする資本財分野では増勢加速。10年11月の製造業販売数量が08年7月に記録したリーマンショック前のピークを凌駕するなか、稼働率も上昇（図表3）。投資マインドが一段と前向きに。
- (4) そうした情勢下、海外からの資本流入に一段と拍車（図表4）。10年10～12月期の対内直接投資は259億ドルと既往最高へ。油田開発を本格化させているペトロブラス向けをはじめ、証券投資もハイペース。新ルセフ政権は中期的に実質6%成長を掲げて発足。就任初年度から目標達成が視野に。

（図表1）消費者物価の推移（前年比）



（図表2）小売売上数量と失業率（季調済）



（図表3）製造業販売数量と稼働率（季調済）



（図表4）直接投資と証券投資

